



## 全日本クラシックカメラクラブ研究報告

# インダストリアルデザイナーの登場とカメラのデザイン — アール・デコからストリーム・ライン —

会員番号: 0809 林田 吉弘

日時: 2011年7月9日

於: 日本カメラ博物館(JCII)ビル6階会議室

半年ほど前、思いがけず、コダック・バンタム・スペシャルが私のコレクションに加わった(写真1)。見事なアール・デコのデザインで見れば見るほどほれぼれとするカメラである。

しかし入手したカメラは135フィルムを使用するためか、内部を大幅に改造してあり原形をとどめていなかったの、探し求めて内部を含めて原形を保っている1936年モデルとコダック・スーパーマチックシャッター付きの1941年モデルの2台のバンタムス・ペシャルを手に入れる羽目になってしまった。

このカメラのデザインを手がけたのはアメリカの初期のインダストリアルデザイナー、ウォルター・ドーウィン・ティーグ(写真2、Walter Dorwin Teague, 1883-1960)である。

工業製品の機能と見栄えを良くする目的で外観をデザインする「インダストリアルデザイン」は1925年パリで開催された現代産業装飾芸術国際博覧会(L'Exposition internationale des arts decoratifs et industriels modernes)を

契機として起こった装飾芸術アール・デコ(Art Deco)が一つの起点と考えられる。19世紀末に始まり、20世紀初頭に隆盛を極めたアール・ヌーボー(Art Nouveau、新芸術)は日本の昆虫や小動物、植物等をあしらった装飾様式を取り入れられるような曲線を主体とした装飾芸術であったが、アール・デコは直線や円を基調とした幾何学的なデザインが特徴とされる。しかし日用品や、工業製品に装飾デザインとして拡大していくに従いアール・デコは必ずしもその様な定義に当てはまらなくなってくる。列車、航空機、自動車など高速を追求する乗り物のデザインとして風洞実験で得られた流線形(ストリーム・ライン)デザインが出現、さらに日用品などへの流線形の模倣も一つの特徴となっていた。

アメリカで活躍した初期のインダストリアルデザイナーにはティーグのほかレイモンド・ローウィ(レーモン・レヴィ)、ノーマン・ベル・ゲディス、ヘンリー・ドレイファスなどがある。アール・デコをラジオ、スチームアイロン、テーブルライト等の日用品や工業製品のデザインに取り入れ、さらに蒸気機関車や自動車の流線形デザイン「ストリーム・ライン・モダン」を作り出したデザイナー達である。カメラでインダストリアルデザインを積極的に取り入れたのはコダックやアグファ・アンスコなど中心としたアメリカのカメラメーカーであった。

バンタム・スペシャルなどの素晴らしいデザインのカメラを生み出したコダック社のカメラデザインを中心にそのデザインの成り立ちと、その基となったアール・デコやストリーム・ラインのデザインを垣間見ることにしたい。

バンタム・スペシャルをデザインしたティーグは、1927年にコダックとデザインの契約を交わし、以後30年間コダックのカメラデザインを主導した。カメラではその他に初期のポラロイドカメラのデザインを手がけている。コダック



写真1 コダック・バンタム・スペシャル  
(コンパラビッド付き1936年モデル)。



写真2 ウォルター・D・ティーグ(1883-1960)  
使っている製図机もアール・デコ風。

クと契約後、最初のデザインにシャッターカバーのデザイン特許(意匠登録)USD82,631がある(図1)。正に円と直線を基本にした幾何学模様のアール・デコのデザインである。ティーグは他に同趣向のシャッターカバーデザインやカバーボードのデザインを多数出願



図1 ティーグの最初のコダックカメラのデザイン  
米国デザイン特許USD82,631 (1930年出願)。

している。

写真3および図2は同じ頃デザインしたボウ・ブローニー・カメラの正面デザインである。このように初期にはティグはカメラ本体のデザインではなく顔に当たる部分を若干化粧するといった係わり方であった。デザイン自体は幾何学模様のアール・デコである。

図3はバンタム・スペシャルの基となった試作機と思われるカメラのデザインで、ミハーリと共同出願したデザイン(USD90,589)である。バンタム・スペシャルと同じような連動距離計がつき、レンズは固定鏡胴になっている。このデザイン特許はミハーリおよびその他の発明となっており、その他の中にティグの名前がある。ミハーリが外観を含めた設計を主導し、後にティグが外観に若干手を加えただけなのだろうか？

写真4は1935年発売のバンタム・オリジナル(ベークライト製)である。その形はファインダーやボディ形状に若干の差異はあるがティグが1933年に出願したデザイン特許USD90,602(図4)に基づいている。

この二つのカメラのボディはいずれも両端がなめらかにすぼみ、流線を表すストライプが横方向に何本も走って、見るからにストリーム・ラインのデザインである。

バンタム・スペシャルのボディの裏蓋内面には、コダックのカメラによく見られるように、そのカメラに関する米国特許番号がびっしりと書いてある。この中にはデザイン特許が二つある。一つは前掲のミハーリと共同出願のデザイン特許であり、もう一つはティグと、機構設計を行ったチェスター・W・クラムライン(Chester W. Crumrine)が1936年に共同出願したUSD99,906で、発明者はティグその他(W.D.Teague ET AL)となっている(図5)。このデザイン特許とクラムラインの機構特許の図と比較して見るとティグの外観デザインとクラムラインの機構設計が共同且つ並行して行われたように思われ、外観デザインと機構設計の統一が図られている。1例としてチェスター・W・クラムラインが1935年に共同出願した5件の米国特許のUSP2,043,968の添付図を図6に示す。バンタム・スペシャルの発売は1936年、デザイン特許の出願も1936年だが、機構特許の出願時期は1935年で、その年には機構設計は完了している。この時点で外観形状は固まっていたと考えられる。後はティグによるリファインされたデザインを待つのみであった筈である。

ティグはその後もコダックカメラのデザインを数多く手がけ、その代表的なものには1939年開催のニューヨーク万博に合わせて自身が先にデザインしたプレット・カメラのシャッターケース部分に万博のシンボルをデザインしたカメラやベビー・ブローニーなどがある。

第二次大戦後の1948年に発売されたポラロイド95、1954年発売のポラロイド80A(写真5および図7)のデザインもしている。この特許もポラロイド社の数名の技術者との共同出願となっている。

このようにインダストリアルデザインは単に表面を飾るデザインから、内部機構との関連性を重視した機能と見栄えの両立を図るデザインに進化していったのである。

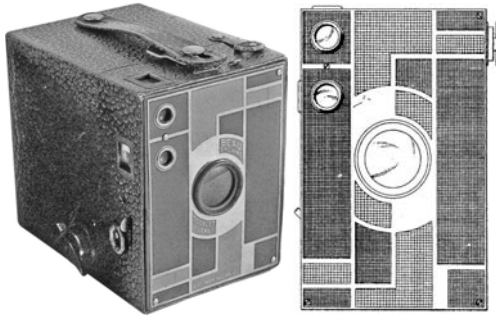


写真3および図2 コダック ボウ・ブローニーの正面デザインUSD83,021 (1930年出願)。

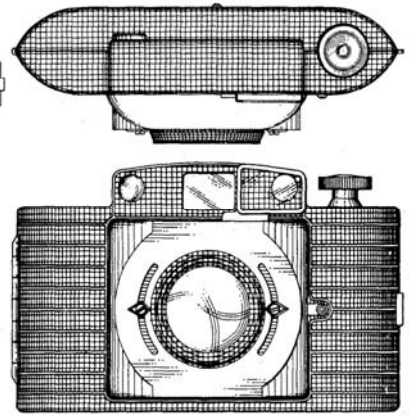


図3 ミハーリとティグの共同出願のデザイン特許USD90,589バンタム・スペシャルの原型。

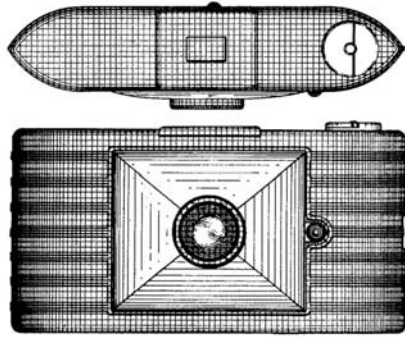


図4 ティグの出願したバンタム・オリジナルのデザイン特許USD90,602、図3のデザインと共通するストリーム・ライン(流線形)のデザインである。



写真4 1935年発売のバンタム・オリジナル。

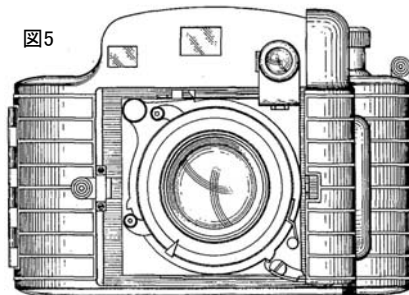


図5

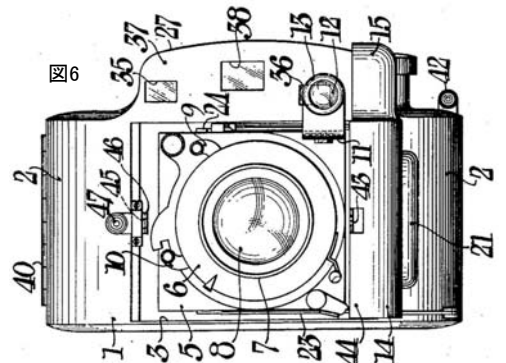


図6

図5(左)ティグとクラムラインが出願したバンタム・スペシャルのデザイン特許USD99,906。図6(右)クラムラインのバンタム・スペシャルのカメラの構造に関する特許USP2,043,968の添付図。1935年には新しいカメラの骨格はほぼ決まっていた、後はティグが流線形デザインにリファインするだけだ。



写真5および図7 1954年発売のポラロイド80A。

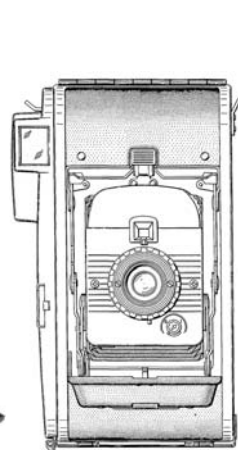


写真6 ティグのテーブルライトのデザイン、ストリーム・ラインの典型だ。

ティグはそのほかにもストリーム・ラインのエクステリアデザイン(写真8)、ボーイングの旅客機ストラトクルーザーのインテリアデザインに至るまで数多くのデザインを行って



写真6 ティーグデザインのラジオ。



写真7 1934年～37年に作られたティグデザインのテキサコのガソリンスタンド。



写真8 レイモンド・ローウィ

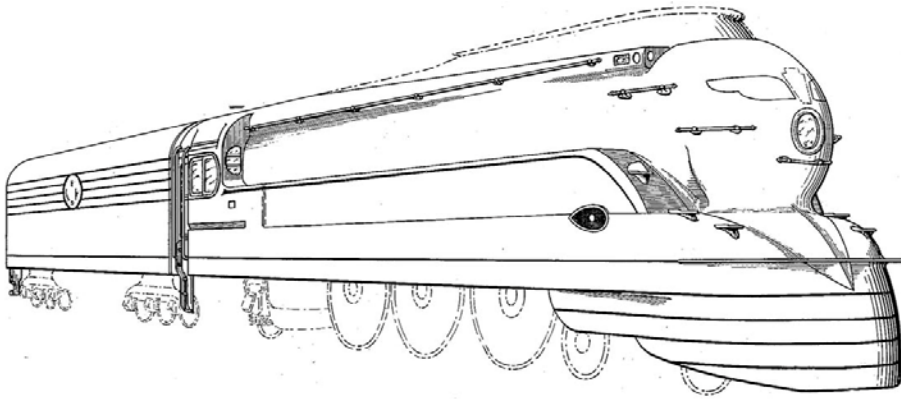


図8 PRR K4s型蒸気機関車のデザイン特許USD106,143。



写真9 PRR K4s型蒸気機関車。

る。ティグが設立したデザイン事務所は現在もボーイング社の旅客機のインテリアデザインを引き受けており、先日羽田に飛来したボーイング787のインテリアもこの事務所が担当しているとのことである。

米国のデザイン特許を調査した範囲では、先に挙げたアメリカで活動した著名な工業デザイナーでカメラのデザイン特許を登録したのはティグだけである。これは少し奇異な感じがする。さらに不思議に感ずるのはドイツや日本のカメラメーカーがデザイン特許に関しては全く無関心なことである。米国のデザイン特許には、権利者の社名がツァイス・イコン、ライツ、フランケ・ウント・ハイデッケ(ローライ)、フォクトレンダーなどでは(スチル)カメラのデザイン特許は1件もない

(ムービーカメラには若干ある、これも不思議だ)。ゼンザプロニカをデザイン盗用で訴えたというハッセルブラッドもアメリカでデザイン特許を登録していない。亀倉雄策のニコンFのデザインもグッドデザイン賞に輝いたキヤノンL1も米国デザイン特許に登録されていない。

バンタム・スペシャルに戻ろう。このカメラの輝くラインが横に流れるデザインは、レイモンド・ローウィ(Raymond Loewy 1893-1986)(写真8)のストリーム・ラインデザインの典型であるペンシルヴェニア鉄道(PRR)のS1クラスやK4sクラスの蒸気機関車(写真9)によく似ている。ローウィはこのK4s蒸気機関車のデザイン特許(図8)のみならず、優れた空力特性が得られる外観構造としての米国特許を取得して

いる。ローウィはフランス人で、主にニューヨークで活躍した工業デザイナーで、1938年に米国籍を取得、その後140社にのぼる米国企業のデザインを手がけ、口紅、ラッキーストライクの箱、鉛筆削り、冷蔵庫から車(スチュードベーカー)のデザインまで数多くのデザインがある。日本では両切りピースの箱のデザインが有名である。

これらの工業デザイナーの仕事を見て、改めてバンタム・スペシャルを眺めると、Bantam (828)判のフィルムの手操作性や撮影操作のしにくさもあるが、その形のあまりの見事さ故に飾り棚に置物として飾って愛でる為のカメラであるような気がしてくる。



全日本クラシックカメラクラブ(AJCC)

AJCCホームページ <http://www.ajcc.gr.jp>

AJCC事務局E-mail [versajcc@dolphin.ocn.ne.jp](mailto:versajcc@dolphin.ocn.ne.jp)